

ハンドボールにおける自チームの競技力向上のためのゲーム分析

Game analysis for competition power improvement of the own team in the handball.

1K05B121

指導教員

主査 奥野景介先生

杉村 二美

副査 杉山千鶴先生

ハンドボールは先行研究でも言われてきたように、コートプレーヤーのポジションにおいて人数の決まりはなく、それぞれのチームの攻撃パターンによってさまざまなスタイルが存在し、今後プレースタイルが常に変化していくと考えられ、各チームによって攻め方や守り方に違いがあり、チームの特徴を生かせるような戦術を立てる必要があるため、いかに戦術が重要であるかということがいえる。2008 年度関東学生ハンドボール秋季リーグにおいて W 大は春季7位という結果から、秋季は3位と大きく順位を上げた。先行研究ではハンドボールにおけるゲーム分析方法は総得点数、総失点数、ボール保持ミス数から算出し、攻撃成功率、シュート成功率など数量化することが一般的になっている。しかしハンドボール競技におけるオフENSE戦術の課題は、防衛ラインを破る(ノーマーク)、人数的優位を作る(オーバーナンバー)、空間的優位を作る(オープンスペース)ことであり、この課題達成のため個人戦術、グループ戦術、チーム戦術を活用し、攻撃が展開される。そのため、オフENSE戦術を分析する際、単なる結果(シュートの成否)のみでなく、シュートに繋がる状況を分析することが有意義である。それらを分析することにより、自チーム及び他チームの特徴を明らかにすることができる。

本研究はオフENSE場面における導入局面(きっかけ)、展開局面(シュートに至る直接的な要因)、最終局面(結果)を分析し、春季リーグと秋季リーグとの違いを見つけ出すとともに、今後、チームの勝利へとつながる戦術を見つける際の有用なデータとして活用することを目的とした。また、

他チームのオフENSEを分析することにより、自チームのディフェンス戦術にも活かす資料を得ることにした。

分析方法は春季3試合と秋季3試合、計6試合の攻撃を(1)導入局面(Introduction)「・3-3 攻撃(以下 I①)・2-4 攻撃(以下 I②)・ポジションチェンジプレー(以下 I③)・3-3→2-4 攻撃(以下 I④)・1 次速攻(以下 I⑤)・2 次速攻(以下 I⑥)・リスタート(以下 I⑦)・6 対 5(以下 I⑧)・5 対 6(以下 I⑨)」、(2)展開局面(Expansion)「・パラレルプレー(以下 E①)・クロスプレー(以下 E②)・ブロックプレー(以下 E③)・スループレー(以下 E④)・個人プレー(以下 E⑤)」(3)最終局面(Finish)「・得点(以下 F①)・シュートミス(以下 F②)・ボール保持ミス(以下 F③)・チャージ(以下 F④)・ペナルティースロー(以下 F⑤)」に分類し、分析した。

分析の結果、春季リーグと秋季リーグを比較して変化がみられたのは、導入局面において春は I①から始まるものがほとんどだったが、秋は I②、I③、I④が増加し、ポジションを変えながら DFE を揺さぶった。それにあわせてポストがブロックやスルーしたことにより、E③や E④といったポストプレーが増加した。さらに最終局面の F⑤のように 1 対 1 からの得点が増加した。これは秋季リーグに向けてのオフENSEトレーニングの特徴であった、1 対 1、2 対 2 といった人数の少ない中でのオフENSEトレーニングを強化したことや、ポストプレー強化したことによって、ディフェンスの動きを瞬時に見極めて攻められるようになり、個々の判断力と技術力が成長したからである。また秋の試合の勝敗を分けた要因は後半の接戦の場面で春は W

大が退場することが多かったが、逆に秋は積極的に 1 対 1 を仕掛けて相手を退場させたことだ。後半競っている場面で 6 対 5 からの得点により、流れをつかむことができたといえる。さらにシュートの打ち込みをトレーニングに組んだことにより、シュート率は試合 1 において約 50%から約 50.8%、試合 3 において約 43%から約 46%と上がった。今後チームの勝利へとつながる戦術は I①だけでなく、I②、I③、I④からポストプレーを強化し、E③、E④を増やす、導入局面においてスピードを強化し、DFE のマークチェンジミスを誘うことで E①を増や

す、1 対 1、2 対 2 は継続して強化していくことで、攻撃が行き詰った場合も得点するチャンスをつくり、そうすることで E⑤が増加し、相手の退場が増える、といったことが示された。

最後に他チームのオフENSEを分析したことにより、G 大は 5-1DFE の弱点を攻めていることや、I③が減少し速いパス回しを封じたということが分かった。また D 大には速いパス回しをされて E①から得点されることが増加してしまったということも分かった。